

日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・岡本楠清・松尾剛平・柴原浅行・谷水宗美・中村明菜・松本恵佑

目的

2000年9月「中部及び西部太平洋における高度回遊性魚類の保存管理に関する条約(WCPFC)」が採択され2004年6月に発効された。我が国も2005年7月に本条約に加盟した。これに伴い、日本周辺に分布するカツオ・マグロ類も国際的な枠組みのもとに管理されることとなった。こうした情勢の中、日本周辺を回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその動向予測、我が国周辺への来遊量の予測等に不可欠な科学的情報を収集、整理することを目的に、独立行政法人水産総合研究センターの「日本周辺国際魚類資源調査委託事業実施要領」に沿って調査を実施する。本調査事業は水産総合研究センター遠洋水産研究所を中心とする全国的な組織のもと実施された。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

方法

沿岸小型船(竿釣り・曳縄・延縄漁業)によるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の県内主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲港と大中まき網漁業による水揚げのある奈屋浦港の計6港において、漁業種類別の水揚量調査を実施した。また、浜島、贄浦、奈屋浦、尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を実施した。

一方、近海・遠洋における中型・大型竿釣り船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

結果および考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣り漁場の変遷を「三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲状況及び魚体測定データは委託元の(独)水産総合研究センター遠洋水産研究所に報告し、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や来遊量予測を行うための根拠として活用された。得られた資源評価や来遊量

予測の結果については、県内の関係漁業者、団体に情報提供した。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細は関連報文で報告されるので、ここでは本県所属船の2010年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況経過について概要を報告する。

1. ビンナガ漁況

1) 中型竿釣り船

QRY情報に基づく2010年の三重県中型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は2,049トンで、比較的好漁となった前年(4,055トン)の51%となったが、平年値(2,049トン、1991~2009年平均)は若干上回る近年並みの水準となった(図1)。

中型竿釣り船によるビンナガ漁は、3月上旬にB海区の西ノ島周辺海域で始まり、3月下旬にはA海区30°N、137°Eでも漁場が形成された。4月は紀南礁を中心に、5月は同海域の他、伊豆列島東側のC海区30~35°N、145~150°Eでも操業した。6月には房総半島南~東沖32~36°N、142~150°Eに収斂し、好漁となった。7月に入ると漁獲は減少し、カツオ主体の操業となった。

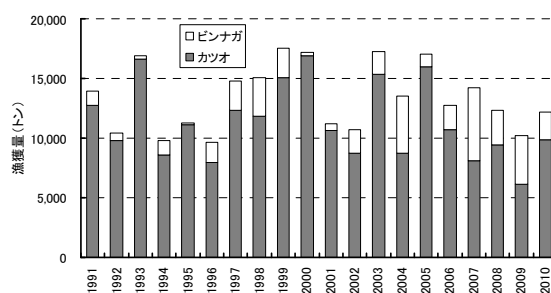


図1. 三重県中型竿釣り船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2) 大型竿釣り船

QRY情報に基づく2010年の三重県大型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は4,734トンで、前年(3,899トン)の121%となったが、平年(9,782トン、1992~2009年平均)の48%にとどまる低調な漁況となった(図2)。

ビンナガの漁獲は4月に鳥島周辺海域30°N、140°Eで始まった。その後漁場は東に移動し、5、6月は伊豆列島東側のC海区を主体に操業、7月には天皇海山漁場(F海区)38~42°N、165~170°E、8月には170°E以東の天

皇海山沖合漁場（G海区）でも操業した。9月以降はカツオ主体の操業となった。

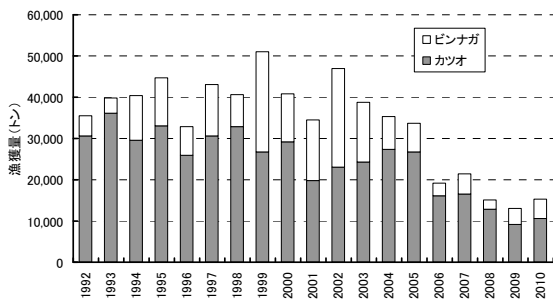


図 2. 三重県大型竿釣船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

2. カツオ漁況

1) 沿岸小型船

三重県主要4港（和具・浜島・長島・尾鷲）における沿岸小型船（曳縄・竿釣）による2010年のカツオ総水揚量は531トンで、前年（969トン）及び平年値（1992～2009年平均：963トン）の55%の低水準の漁獲となった（図3）。

春季のカツオ漁は4月までは曳縄を主体に好漁となったが、4月中旬以降、熊野灘沿岸域は冷たく単調な海況が続く、漁場形成は散発的で、特に小型一本釣りの漁獲が低調となった。夏季以降の漁場形成も散発的で、水揚量も低水準で推移した。

3～5月の漁獲主体は銘柄「中小」（体重1.5～2.0kg）、6～9月は「中小」～「特大」（4kg以上）の幅広い銘柄の魚が水揚げされ、10月以降は「大」（2.5～4kg）主体となった。

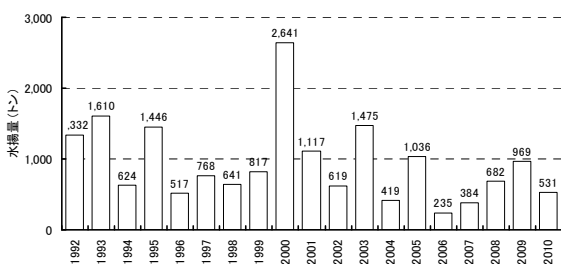


図 3. 三重県主要4港（和具・浜島・長島・尾鷲）における沿岸小型船（曳縄・竿釣）によるカツオ水揚量

2) 中型竿釣船

QRY情報に基づく三重県中型竿釣船による2010年のカツオ総漁獲量は9,854トンで、1987年以降最低の漁獲量となった前年（6,122トン）の161%、平年（1987～2009年平均：10,809トン）の91%の漁獲量となった（図1）。

操業は1月中旬より硫黄島～西ノ島周辺海域で始まっ

た。3月には西方に広がり、紀南礁南部海域も漁場となった。4月に入ると漁場は北上し、5月以降収斂することなく紀南礁、硫黄島～伊豆列島周辺海域及び房総半島南東沖に広く分散した。7月に入り、漁場は常磐～三陸沖に収斂し、8～9月にはやや北上した36～42°N、143～155°Eで操業した。10月にはやや南下し、三陸沖38～40°N、142～145°Eにも漁場が形成された。近年では珍しく12月まで操業した船もあった。

3) 大型竿釣船

QRY情報に基づく2010年の三重県大型竿釣船によるカツオ総漁獲量は10,649トンで、1992年以降最低の漁獲量となった前年（9,157トン）は若干上回ったものの、平年（25,021トン、1992～2009年平均）の43%と近年並の低調な漁獲量となった（図2）。

2006年以降の漁獲量の減少は三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少（2005年：20隻、2006年：12隻）に起因するところが多い。本年度の年間CPUE（1日1隻あたりの漁獲量）は6.3トンと前年（4.4トン）、前々年（5.4トン）を上回った。

3. クロマグロ漁況

三重県内主要6港（和具、浜島、宿田曾、奈屋浦、紀伊長島、尾鷲）における2010年のクロマグロの総水揚量は18トンで、前年（54トン）の32%、平年値（52トン、1995～2009年平均）の34%と低水準の水揚げとなった。漁獲の主体は定置網とまき網で、それぞれ水揚量の41%、37%を占め、次いで沿岸カツオ一本釣り（18%）が多かった。

一方、夏季に行われる養殖用種苗のヨコワ（0歳魚）漁は、前年と同様7月下旬に始まった。養殖種苗用のヨコワ漁が盛んな浜島地区における2010年漁期の総漁獲尾数は約4,800尾で、前年（約8,800尾）の55%の採捕尾数となった。

関連報文

平成22年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書、（独）水産総合研究センター、平成22年度三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括、三重県水産研究所。